高齢者グループリビングの持続的運営に関する研究

－先駆的事例 COCO 湘南台の 15 年の経験にもとづく考察－

A STUDY OF THE SUSTAINABLE MANAGEMENT FOR THE ELDERLY GROUP LIVING

Consideration based on the 15 years' experience of COCO Shonandai, the pioneer case

土井原 奈津江*, 大江 守之**

Natsue DOIHARA and Moriyuki OE

15 years have passed since COCO Shonandai, Elderly Group Living (EGL) was established. The residents became older and changed. We analyzed the correspondence of the management organization to these changes and made the problems clear.

- 1) 3 people who have lived since the start point passed away in 2009 and the new residents joined as new members. Although ageing and the increase of the care-needed members were eased temporarily, the situation will proceed to the similar one of 2009 again.
- 2) The residents of COCO Shonandai have changed frequently since 2010. This situation might continue and the diversity of residents will extend. It is necessary to improve the decision-making system to correspond to the new situation. The management body should have responsibility to cooperate with the service suppliers, to make consensus among the residents.

Keywords : *Elderly Group Living, Life Support Services, Management Style, Sustainability*

高齢者グループリビング, 生活支援サービス, 運営形態, 持続性

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

高齢人口の増加や家族形態の変化によって高齢単独世帯が増加し、2010年には498万世帯に達した。これは25年前の118万世帯から380万世帯の増加であり、25年後の2035年には762万世帯へとさらに264万世帯の増加が見通されている¹⁾。高齢期の生活は介護問題と直結して論じられることが多いが、後期高齢者でも7割は要支援・要介護ではない^{注1)}ことに目を向ければ、単独世帯が急増するなか、高齢者の孤独や不安、不十分な栄養摂取²⁾等は介護予防の観点からも解決すべき課題の一つである。これまでの高齢期の住まい・暮らしの選択肢は、暮らしに係わる様々なことを自分で行うかその多くを入居施設の管理者に委ねてしまうかのどちらかにほぼ限られ、その中間にある必要な支援を受けながら自立して暮らすというものが極めて少なかった。特に、高齢人口の少なからぬ割合を占める中間所得層は、一定の蓄えと年金によって、自分らしい暮らしを選択できる自由度を持ち合わせているにもかかわらず、その選択肢が社会的に用意されてこなかった。

そうしたなかで、1999年に神奈川県藤沢市に「自立と共生」を理念に掲げ、高齢者グループリビングCOCO湘南台が作られた。この運営主体であるNPO法人COCO湘南は、続いて2003年に同様の

仕組みを持つCOCOありまを海老名市に開設した。この新しい住まい方の提案と実践に注目した財団法人JKA（旧日本自転車振興会）³⁾が、COCO湘南台をモデルとして^{注2)}2005年度から「高齢者生活共同運営住宅（高齢者生き活きグループリビング）補助事業」を開始し、2011年度の終了までに16件のグループリビングが全国に整備された。COCO湘南台型の高齢者グループリビングは国交省や厚労省あるいは地方公共団体の制度によらない事業でありながら、他の制度外の高齢者共同居住の事例にはみられない普及可能な仕組みであることを多くの実践例を通して社会に提示したと言える。

COCO湘南台型グループリビングの基本的性格は、「自立と共生」の理念に表現されているように、高齢者が集まって住むスタイルでありながら、ケアを受けることを主目的とした共同居住ではない点（自立）、居住者間の共同性を生み出すために小規模である点（共生）にある。他の高齢者共同居住（高齢者施設や高齢者住宅等）にはほとんどみられないこうした性格に魅力を感じ、自分たちも取り組みたいという人々が、現在にいたるまで途絶えることなくCOCO湘南台に視察に訪れ、また運営NPOへ相談をよせている。^{注3)}

しかし、居住者が歳を重ねるなかでケアを必要とする度合いは増加し、また居住者の入れ替わりが起るなかで共生の状態は変化する。本論文は、「自立と共生」を理念としてスタートし、15年が経

* 慶應義塾大学SFC研究所
上席所員・修士(健康マネジメント学)

** 慶應義塾大学総合政策学部 教授・博士(工学)

Senior Researcher, Keio Research Institute at SFC, M.Health Management

Prof., Faculty of Policy Management, Keio University, Dr.Eng.

過した先駆的事例である COCO 湘南台を対象として、時間が経過するなかで居住者にどのような変化が生じ、運営上どのような問題が生じているのかを明らかにし、高齢者グループリビングの持続的運営を実現するために必要な方策を考察することを目的とする。

1.2 研究の位置づけ

「グループリビング」という用語を Web で検索すると 2013 年 3 月時点において全国で 117 件の事例が確認できた。このなかには、サ高住や有料老人ホームもあれば、高齢者下宿等とよばれる食事提供がなされる賃貸住宅も含まれるなどその実態は多様である。上和田他 (2007) ⁴⁾ も「グループリビングなどと称される施設ケアと在宅ケアの両方の特徴を持つ 20 人程度以下」の小規模地域分散型高齢者居住施設を網羅的に調査し、その多様性を指摘している。また、「グループリビング」をタイトルに含む既往研究のなかには、ケア付き仮設住宅を対象とした三浦他 (2000、2001) ^{5) 6)}、過疎地域の積雪期間中の住居を対象とした佐々木他 (2000) ⁷⁾ などがある。^{注 4)}

本研究は、こうした広義の、あるいは対象を特化したグループリビングではなく、西條節子氏がリーダーとなって切り拓き^{注 5)}、JKA 補助事業等を通して広がっている「COCO 湘南台型のグループリビング」を視野に入れつつ、そのプロトタイプの「自立と共生」をめざす運営の特徴と 15 年の変化に焦点を当てたものである。既往研究には、COCO 湘南台型やそれに近い事例を対象とした永井他 (2010) などがあり^{8) 9) 10)}、地域との交流が重要であるといったグループリビングの本質を見抜く貴重な指摘がなされているが、運営や居住者の生活の時間的変化を扱ったものはなく、この点に本研究の新規性がある。

今後の高齢者居住を展望すると、サービス付き高齢者向け住宅制度を利用して空き家を改修し、小規模なグループリビング・スタイルの運営を行うところも出てくるだろう。「東京都民間住宅活用モデル事業 (空き家活用モデル事業)」のなかの「高齢者住宅確保要配慮者の共同居住 (グループリビング)」として整備されたグループリビング・みたかの家はその先駆けであり、COCO 湘南台に学んでつくられたものである^{注 6)}。本研究が提示するグループリビングの持続的運営のための方策は、こうした今後広がる可能性があるグループリビング的居住スタイルが、時間の経過とともに直面する課題に対して有益な知見を提供するとともに、その解決を見越した運営形態を構築する上での実践的知見を得ようとする志向性を持っている。

2. COCO 湘南台の成立構造

2.1 グループリビングの構成要素

筆者らは研究の開始当初、西條節子氏の著書等を参考にしつつ、高齢者グループリビングを以下のように定義した。すなわち、「複数の住戸(または居室)と共同生活空間から構成される住宅において、コミュニティの中の様々な資源による食事・清掃・健康維持等に関する基礎的生活サービスを受けながら、高齢者が安心して自立した暮らしを目指す住まい方」¹⁵⁾である。高齢者グループリビングとは「住まい方」、すなわち居住スタイルであり、その構成要素は、基本的に①居住者(集団)、②居住空間、③生活支援サービスの 3 つであると言える(図 1)。ただ、上記の定義ではこれらを組み合わせて具体的な暮らしを実現するために、誰がどのように意思決定し、また責任を負うのが明確にできていなかった。高齢者グループリビング

の持続的運営について知見を得るためには、この点を整理して分析のための枠組みを明確にする必要がある。まず、3 つの構成要素について、COCO 湘南台が当初想定した内容を整理し、2.2 で意思決定や責任の所在など運営システムについて整理する(図 2)。

(1) 入居者

入居者数は 10 名である。1 人 1 室で、夫婦で 1 室に住めないかという打診には応じていない。「はじめに」のなかで高齢者グループリビングの基本的性格は「小規模」と述べたが、ここでいう小規模とは数名という規模ではなく 10 名程度という意味である(以下でも同様の意味で「小規模」を用いる)。また、入居者は高齢者に限定しているが、入居資格年齢は定めていない。

10 名にした理由として、西條氏は、孤立しない関係、生活環境の余裕、経済的な余裕の 3 点を挙げている。第一は全員でコミュニケーションをとることができ、同時に誰かが排除されるようなおそれがあるほどの少人数ではないこと、第二は住宅内の共用部分(食堂・居間やアトリエ)に余裕のある広さがとれること、第三は居住者全員で共同購入する食事サービスや共用部分清掃サービスが、利用側・供給側双方からみてコミュニティビジネスとして無理なく成立することである。西條氏は言及していないが、参与観察から把握できることとして、この居住スタイルの根幹の一つである手作りの夕食が、10 人であれば、主婦の家庭調理のスキルの延長で可能であり(例えば 5 人家族の倍の量をつくらればよい)、同時に台所設備も調理器具も家庭用で対応できるという点(実際に業務用機器は皆無である)を指摘することができる。

(2) 居住空間

COCO 湘南台は神奈川県藤沢市の湘南台駅から徒歩 10 分の場所にあり、土地区画整理事業によって整備された住宅地に立地している。近隣には図書館、郵便局、スーパー、病院、公園などがあり、利便性が高い場所である(図 3)。区画整理後も梨畑として使われていた土地の所有者と交渉し、希望する仕様の建物を建設してもらい、NPO 法人 COCO 湘南が一括借上げしている。建物は木造 2 階建てで延床面積 454 m²、バリアフリー構造となっている。1 人当たりの延床面積は 45.4 m²であり、西條氏は当初から 15 坪(49.5 m²)を目安として計画を進めていた。専用部分は 10 室で面積は各 25 m²であり、延床面積の半分は共用空間になっていることになる。その構成は、廊下・階段以外に、食堂・居間、キッチン、ゲストルーム、浴室(数人用と 1 人用の 2 ヶ所)、洗濯機置場、アトリエとなっている(表 1、図 4)。COCO 湘南台型グループリビングを特徴づける「アトリエ」は、「おしゃべりやお茶を飲んだりしながらのコミュニティ。相談や仕事をしながらのコミュニティ。その他なんでもできる場としてみたいと考えた。」¹¹⁾と述べられているように、地域に開かれた空間として意識されていた。数人用浴室はアトリエに隣接して配置され、ミニデイサービスの利用も視野に入れられていたが実現はしていない。NPO のスタッフが常駐し、会合を行ったり、居住者がお茶を飲んで雑談したりという形で使われている。^{注 7)}

(3) 生活支援サービス

生活支援サービスは主として夕食づくりと共用部分の清掃である(昼食は希望者が希望日にお弁当の配食を手配してもらう)。開設当初、食事づくりは既存のワーカーズコレクティブ(WC)に委託した。共用部分の清掃はこの WC が対応できなかったため、NPO の

構造・階数	木造・2階建
敷地面積	913㎡(276坪)
延床面積	484㎡(146坪)
個室面積	25㎡(15畳)
個室数	10室
共用部分	233㎡(71坪)

入居一時金 (10年償却)	370万円
月払い費用(a)～(d)	13.7万円
家賃(a)	7万円
家事契約費(b) (食事作りと掃除)	2.1万円
食費(c) (夕食の食料費、 昼食の配食費)	3万円
共益費(d)	1.6万円

図4 COCO湘南台の敷地と間取り S=1:400

2.2 グループリビングの運営システム

り、同時に住居というハードウェアよりも住まい方、暮らし方という居住スタイルにグループリビングの本質があることを明確化した定義である。また、冒頭に「自立と共生」の理念は、「ケアを受けることを主目的とした共同居住ではない点（自立）、居住者間の共同性を生み出すために小規模である点（共生）」と述べたが、これらに加えて、「居住者が共同して自らが購入するサービスを選択する」という自己決定を含んだものであると言える。つまり、共同性を生み出す基盤は、居住者の合意形成によって暮らし方を変えていくことができるという点にある。その居住者の意思決定をもとに契約主体となる NPO 法人は、建物を一括借上げしていることによって、空き室のリスクも負っている。また、食事づくりの件費は 10 人で負担しており、空き室ができると一人にかかる負担が大きくなるおそれがある。現在までは費用負担の変動はないが、常に入りたい人が待っているような状態を作り出す責任が、法人にも居住者にも課せられているということである。15 年間の暮らしの継続のなかで、責任を伴う自己決定が具体的にどのように行われてきたのか、そしてそれはどう変化してきのかを以下でみていくことにする。

3. 居住者の変化と暮らしの変遷

3.1 調査方法

COCO 湘南台は、10 人の高齢者が日々暮らす場であり、調査は居住者のプライバシーに十分配慮して行わなければならない。筆者らは 2009 年 9 月から約 4 年半、延べ 280 日にわたって参与観察を続け、信頼関係を築きながら、居住実態とその変化を把握してきた。また、契約書類、理事会議事録等のドキュメントの整理・分析、NPO 法人スタッフ、居住者、サービス提供者へのインタビューを実施した。文書調査は 2013 年 9 月から 2014 年 4 月を中心に行い、その後必要に応じて追加調査を行った。また、居住者インタビューは 2013 年 10 月から 2014 年 3 月にかけて行い、その後追加調査を行った。なお、居住者のプライバシーを守るため、分析結果に影響を与えない範囲において居住者属性に若干の変更を加えている。^{注8)}

3.2 分析の枠組み

COCO 湘南台には開設から 2014 年 3 月までに、現在居住してい

注1)老健：介護老人保健施設 GL:グループリビング 有料：有料老人ホーム
サ付：サービス付き高齢者向け住宅
注2)図内の数字は人数を示す

図5 居住者の入退去に関する基本特性

る 10 人を含め延べ 21 人の居住者がいる。この 21 人を対象として、居住期間とそのなかでの年齢や要介護度の変化を把握するとともに、入居契機や退去理由等に関する集計を行った(図 5、図 6)。一方で、公表されている西條節子氏の著書や記事、理事会・居住者ミーティング・グループリビング研究会等の議事録、居住者インタビューによって、15 年間の変化を整理した。整理の軸として、共同生活の変化、庭、食事、ターミナルケア・お別れ、ライフサポーターの 5 つを据えた(表 3)。

「共同生活の変化」はグループリビングでの生活に関する居住者の言及のなかで、それぞれの時期のポイントになると考えられるものをとりあげた。「庭」は共同生活の状態が具体的に表れる一つの事象であり、「共同生活の変化」の一部を成すものである。「食事」も共同生活の重要な要素であり、また共同購入の中心的対象であることからとりあげた。「ターミナルケア・お別れ」は COCO 湘南台の共同性の一つの象徴的事象であり、これをめぐる事実と居住者の考えをまとめた。最後に「ライフサポーター」は導入から今日までずっと議論が続いている共同購入対象のサービスであり、その議論から共同生活の変化を読み取る。

居住者の変化とグループリビングの暮らしの変遷を概観すると、模索期(1999 年から 2000 年)、安定期(2001 年から 2009 年)、変動期(2010 年から現在)の大きく 3 期に分けることができる。時期区分の根拠も含めて、各時期ごとに居住者と暮らしの変化を関連させて分析する(居住者の発言にもとづく記述は表 3 を参照)。

3.3 模索期(1999 年～2000 年)の居住者と暮らし

この期間は最初の居住者 10 人に変化はない。最初の居住者に男性が 1 人含まれていたが、それ以外は今日に至るまで全て女性である。入居当初は 70 代が 6 人、60 代と 80 代が 2 人ずつであった。

現在までの居住者の延べ人数は 21 人であり、入居者属性はプライバシーへの配慮もあって、この 21 人で集計している。これを概観すると、入居の契機は 13 名(62%)が法人関係であり、その全てが西條節子氏とのつながりからであった。契機の第 2 位はメディアを通しての 7 名であるが、マスコミに取り上げられるようになって

注) 年次のスケールは、年度を示す。

図6 居住者、サービス提供者の変遷

表3 グループリビングの暮らしの変遷

	年	共同生活の変化	庭	食事	ターミナルケア・お別れ	ライフサポーター
模 索 期	1999	ミーティング開始 B(R)・月1回のミーティングと年2回の会計報告は必ず行われた B(R)・ミーティングでは行事や生活上の具体的な問題について、活発な発言があり、皆が納得したうえで決定された。こうして生活の改善を図ることができた B(S1)・共同生活が約6ヶ月になり、飛び出す不満の数々 人間関係 R・みんな個性的ではっきりした人たちだったので喧嘩もあった B(R)・夕食の後片付けなどの生活の仕方でも、めることがしばしばあった B(R)・もめごとは話し合いやユーモアで乗り越えた K(R)・簡単に過ごした1年ではなかった。楽しく暮らしましょうとお互いに励まし合った(0005) R・落ち着くのに2年ぐらいかかった	庭の状況＊ R・入居時の庭は一面雑草だった。畑を整備するまで1年かった 庭の状況＊ R・畑は10区画にして居住者に割りふられ、それぞれが自分の畑に好きなものを植えて育てた R・庭仕事は未経験者が多かったので、近所の農家の人に植え方を教わった R・喜んで畑仕事をやり始めたが、収穫後始末しきれず、畑の経験者が片づけた 庭の状況＊ R・好きな人だけが庭仕事をするようになった S・人数が少なくなってくる(4人)と庭仕事が楽しく自由にできた。若かったし受け持の畑が増えても大丈夫だった 収穫した野菜＊ A・時間に余裕があると家庭菜園でとれた野菜の料理を十人分、楽しく作る R・夕食にみんなで喜んでいただいた	AS1が食事サービス開始 B(S1)・食事サービス事業者AS1と居住者の献立についての話し合いの機会を設けた。居住者が1人ずつ委員になり、各年代の代表として意見を述べた 食事の献立 A・栄養のバランスはいいが、居住者の嗜好と合わなかった A・サービス事業者に意向を伝えた→サービス事業者が意向を汲み食事が改善した 食事当番＊ (居住者が当番で半調理品を温め、配膳、後片付けをする) R・食事当番はてんやわんやで、居住者間に問題がおこった R・2日に1度食事当番が廻り、自由な生活を求めているのに、自由がないと思った R・話し合いをして7月からAS2にサポートを頼むことにした	■凡例 文字資料 B：本、雑誌等 B(S2)：文献12) B(R)：文献16) A：赤旗 2004年1月～6月(5回掲載分) 西條節子、元気印の高齢者共同生活 K：NPO法人COCO 湘南会報 議事録 N：理事会 M：居住者ミーティング G：グループリビング研究会 注1 G(S)のGは文字資料、(S)内のSは発言者を示す 注2 文の最後の()は年月を示す。Ex.2015年2月は(1502)と表示 注3 文章中ワークスコープおりーぶはAS2、最初の食事サービス事業者はAS1と表示	発言者 S：西條氏 R：居住者 L：ライフサポーター W：ワークスコープ おりーぶスタッフ 聞き取り調査 ＊：必ずしも直後のことではない
	2000	居住者の様子 K(S)・居住者は、旅行、ボランティア、仕事などに忙しかっていた 暮らし B(S1)・手探りで暮らし心地を探っているが少しリズムに乗り出した			ターミナルケアの前段階 B(S1)・1人の居住者が手術を回避したことをを受けて周りの居住者が心配 B(S1)・ミーティングで自己決定はどこまでをさすのか話し合い、本人の意志を尊重	ライフサポーターを設置(0307) K(S1)・高齢化に伴い『個人の意思を尊重』しながら、『生活者の自主・自立を支援する』ということが、ライフサポーターのもっとも大切な役割。当分の間は試行錯誤の連続ということになるかも知れない(0411) L・最初の頃は誰もサポートを頼んでこなかった
	2001	共同の習い事 A・みんなの希望で月1回ピアノ、ウクレレ、ギターの先生を招き、居住者やライフサポーターと一緒に楽器を習った(2年間続く) A・ウクレレグループが誕生会で演奏した			1度目のターミナルケア(0312～0403) B(S2)・西條氏が居住者のターミナルケアの意向を受け、他の居住者の同意をとり、地域の医療・看護・福祉機関とネットワークを作った R・Zさんは部屋でヘルパーにベッドを上げ下げしてもらい、庭を眺めながら生活していた L・最初にはみんなターミナルケアをすることに動揺したが、反対はなかった。居住者には迷惑がからないように常にヘルパーを置き、配慮していた	ライフサポーターについて居住者の意見(アンケート結果) G(R)(0804) ・心配りがある ・庭仕事にも気軽に参加してくれる ・ライフサポーターの存在はいるだけで心強く安心できる ・病気などの緊急時や入院時の対応が早い ・長時間病院に付き添ってくれて心強い ・ライフサポーターの役割を明確化して欲しい ・入居者に対して公平に対応して欲しい ・個人の尊厳とプライバシーの遵守して欲しい ・管理者ではなく援助者としての行動して欲しい ・ライフサポーターとコーディネーターの連携の必要性 ・迅速な地域とのネットワークの必要性
	2003			食事サービス事業者の変更 AS1からAS2に変更した(0404) AS2についての感想＊ R・AS1は給食みたいな感じだったので、AS2に変わってやっぱ家庭料理が食べられると思った R・夕食が楽しくなった。毎日作り手が違い変化があるのがいい R・歳をとると人間は食べることが中心になるから食事は重要 R・AS2は、年1度懇談会を開き、居住者の意見をよく聞いてくれる。毎月献立表が出来た時には居住者に見せて要望を開き、できることには応えてくれる R・好き嫌いに対応してくれる。そのためカレーは3種類ぐらい作っているようだ	ターミナルケアの感想＊ R・私たちの生活は別のもちと思ってた。特に生活の変化は感じなかった R・すごくいいことだと思った。でも一緒に生活する場では重く感じた L・常に介護の人たちがいて。必要だから手伝いに来てという話はなかった L・死期の間近な人があるという雰囲気はなかった A・“生や死”について、ごく自然に話題になるようになった	
安 定 期	2004	健康状態 A・住民の平均年齢76歳。それぞれが高血圧気味、高血糖値など、体に異変を感じるようになってきた	新しい居住者の加入＊ R・私が入居した時(2005年)、皆さん高齢で庭仕事をする人が少なく(3人)、庭が荒れていたんで、がんばって綺麗にしたいと思った。当時庭には木がなく、畑のような感じだった。庭に木を植えたいと西條さんに申し出たら、受け入れて下さった R・入居してきたXさんは庭仕事に慣れておりよく働いた S・Xさんが庭に木を植え始めると他の居住者も植えるようになり木が増えた。庭は邸宅のようになり、みんなもそれを歓迎した			
	2005	介護保険教室 A・介護保険の利用方法を今のうちに学習しようと提案があり、介護予防教室を開催した				
	2006	バスメイト・ベルメイトを開始 K(S)・徐々に高齢化してきたため、“共生”しながら安心して住み続けることができるようにとミーティングで話し合い、『バスメイト』と『ベルメイト』という仕組みを作った(0608)	庭の状況＊ S・2007年から2011年ぐらいまで鈴虫を育て増やし、老人ホームや近所の子供たちに配っていた。その頃は畑にきゅうりやナスを主に植えた		2度目のターミナルケア(0910-0912) ターミナルケアの感想＊ S・居住者のターミナルケアの意向を受け、他の居住者の同意をとり、地域の医療・福祉機関とネットワークを作った。一度目よりも地域の体制が整っていた R・特に私たちの生活には影響はなかった R・介護の方が浴槽を部屋に運んでいた。部屋でお風呂に入れるのはいいと思った。 R・廊下を歩くのにも気を使った。気になって外出もままならなかった R・このようなことは西條さんが若かったからできたと思う R・高齢な方から亡くなられたから、動揺はなかった W・研究しながら流動食作りをした。Zさんの好みは知っていた。ヘルパーの記録から何が喜ばれているかを調べながら作った	ライフサポーターを増員(1004)＊ N(S)・居住者の高齢を考えると、支援すべきことも変化してきてライフサポーターを増やす必要を感じる(1002)
	2007					
	2008					
	2009					
	2010					
	2012	高齢化の不安 G(R)・みんな同じように歳をとっていくので、これからどうなっていくのだろう。特に西條さんの高齢化が心配(1202) G(R)・夜中地震でもあれば、車椅子や高齢な人は一人では厳しいし、若い居住者に負担がかかる(1202)	庭の状況＊ S・木を植えたら、鳥がやってくるようになったので、大工仕事で鳥小屋を作った。鳥が巣をつくり、雛を育てるのをみんなで見守った。鳥が糞をするので雑草が増えてきて草刈が忙しくなった。 R・鳥の餌台が南向きのどの部屋からも見えるようになり、今まで餌台が見えなかった人が興味を持って餌を与えていた			ライフサポーターの増員後の意見＊ R・これまで誰も気が付かなかった食器の消毒などをしてくれ助かっている R・車椅子の生活だが、ライフサポーターのちょっとした手助けで普通の生活が出来る R・ライフサポーターが自分のためにどの様に利用できるかわからない R・ライフサポーターに頼りすぎるとライフサポーターがたいへんになる L・新しく入ったライフサポーターは自分から仕事を見つけ、主婦の目線でこれまで居住者やライフサポーターが気づかなかったことをしてくれ、みんな喜んだ L・一部の人が新しいライフサポーターに個人のサポートを頼み始めた
	2014	雰囲気の変化 M(R)・開設して、ここまで来られたのは、西條さんがみんなのことを褒め、また何かあったら支えてくれたからだ。この頃雰囲気が変わってきた。原点に戻り、考えて生活したい(1502)				ライフサポーターをさらに増員の提案 G(S)(1408)に対しての居住者の意見 G(R)・ライフサポーターを増やすという話があるが私は反対。今のままで十分足りている(1408) R・一部の人がライフサポーターを利用していないのは不公平。個人サポートは有料にするべきだ＊
	2015	新しい居住者＊ S・新しく入ってきた人は先輩たちに遠慮して庭仕事に入らない。先輩は引いて、新しい人達をたてることも必要。そこがいいところでもあるし、寂しいところでもある R・最近入居する人は生活ができた中に入ってくるので、生活を変えていくのは難しいかもしれないが、おかしいと思ったら言ってもらえるといい R・新しい人が出て行ったときは心が痛んだ。共同生活は許容することが大切	加齢 R・畑をやる人(3人)はみんな歳をとり、以前よりも庭仕事の時間が少なくなった		お別れ＊ S・2009年は3人の居住者が死亡。うち1人はターミナルケア、2人は病院で亡くなった。3人は本人の希望でCOCO 湘南台に運ばれ、お別れ会を行った R・亡くなったら、こういう風にしてもらえるんだと思い安心した R・死のことをオープンに話せるようになった	
変 動 期						

てからになるため、初期の入居者はほとんど西條節子氏のつながりのある人々であったと考えてよい。前住地も 18 名（86%）が藤沢市内であるのは、このことと関連している。

このように、居住者たちはもともと西條節子氏のつながりはあったが、喧嘩やもめごととも経験しながら、落ち着くまでに 2 年ほど要した。もめごとの原因の一つは、食事の当番だった。最初の食事サービス WC（表 3 内の AS1）は、半調理品を届けるだけで、温めて配膳し、後片付けをするのは居住者が行う必要があった。この当番をめぐるトラブルを避けるために、清掃を担当していた WC（表 3 内の AS2）のメンバーが当番の行っていた仕事を代替するようになった。こうした変更につながっていくグループリビング内の話し合いは、開設当初から現在まで続く月に 1 回の居住者ミーティングで行われている。このミーティングが居住者間の合意形成を図るためのベースになっている。表 3 の凡例にある「グループリビング研究会」は、NPO の理事長、常務理事、担当理事、コーディネーター（居住者の 1 人）、ライフサポーターによって構成されるグループリビング運営に関する話し合いの場であり、居住者の声が組織的な意思決定へと進む場合には、ここで時間をかけて議論される。組織として最終的な意思決定は理事会でなされる。この三段階の合意形成と意思決定の場すべてに西條節子氏がおり、そのリーダーシップによってこれらの場が有機的に機能していると考えることができる。

共同生活の状態が外に表れる場である庭は、開設から 1 年かけて畑ができる状態に居住者によって整備され、10 人の菜園に区画された。その後 1 年が経過すると耕作する人数は 4 人に減ったが、畑が好きなメンバーが熱心に取り組んでいた。

3.4 安定期（2001 年～2009 年）の居住者と暮らし

2009 年までの 9 年間を安定期としたのは、2009 年まで初期メンバーのうち 7 名が居住を継続していたからである。3 名が入れ替わったが、加わった 3 人は長く居住を続けた。したがって、この 9 年間は居住者の加齢が進んだ期間であるとも言える。この期間の重要な点は、初めて経験した居住者の入れ替わりに加えて、食事づくり WC の変更、ターミナルケアの経験、ライフサポーターの導入の 4 点である。

（1）加齢と居住者の入れ替わり

加齢に伴う身体的不調が意識されるようになった。これを受けて、2006 年に「バス・メイト」と「ベル・メイト」という仕組みが導入された。バス・メイトは数人で一緒に入浴することであり、入浴中の事故を防ぐとともに、コミュニケーションの円滑化を図る目的で導入された。「ベル・メイト」は各部屋のボタンを押すと、同一階の居住者が気づくようにベルが鳴る、緊急時に知らせあう安心の仕組みである。これらは西條氏が提案し、居住者ミーティングで話し合っ

て導入が決まった。2005 年に庭いじりが好きな居住者（表 3 では X さん）が加わった。そのとき、庭はやや荒れていたという。加齢によって手入れが十分に行き届かない状態になっていたのである。X さんは畑や草花の手入れだけでなく、植樹にも積極的で、他の居住者から歓迎された。居住者の入れ替わりが暮らしを活性化させたと言えよう。

（2）食事づくり WC の変更

2004 年 4 月に変更が行われた。この経緯については、2.1（3）で述べたとおりである。居住者からは、「家庭料理が食べられるように

なって、夕食が楽しくなった」という好意的な評価が得られている。この WC は居住者のニーズに沿いながら 10 年以上食事づくりを担当している。COCO 湘南台は「居住者によるサービスの共同購入」する仕組みを特徴とするが、サービス供給者との信頼関係を築きながら、サービスを向上させることが大切であることが、この経緯から読み取れる。

（3）ターミナルケアの経験

西條節子氏が著書¹²⁾の中で詳細に記述されているのが 2003 年暮れから 2004 年春にかけてのケースである。2009 年暮れのケースも同様であるが、西條節子氏が居住者に声をかけ、了解を得た上で地域の医療、看護、介護、生活支援サービスの連携体制を作り実現させた。居住者の意思が尊重され、地域の医療介護資源との関係を深めることにも繋がった。ターミナルケアの経験について他の居住者からは、「いいことだと思った」、「自分の終末についてみんなで話し合うようになった」という意見がある一方で、「一緒に生活する場では重たく感じた」、「廊下を歩くにも気を遣った」という声もあった。少人数の生活の中でターミナルケアを行うことは一部の居住者にとっては精神的な負担があった。生前の居住者間の関係性やコーディネート力に左右されるものである。居住者の声として「このようなことは西條さんが若かったからできた」という指摘もあり、西條氏のリーダーシップが大きかったことがうかがえる。

（4）ライフサポーター

2003 年からは、「ライフサポーター」と呼ばれるスタッフを法人が雇用する形で、共同生活全般に関するサポートを行うようになった。居住者の加齢が進み、生活の細部における対応が必要になったためである。ただ、法人内で雇用されるようになったライフサポーターの役割は必ずしも明確ではない。外部サービスを購入するときのような契約関係はなく、細かい就業規定も定められていない。導入後 10 年以上を経た現在でも、「何を頼み、何をしてもらうかをめぐると不公平感がある」といった声があり、グループリビング研究会でもあり方の議論が続けられている。

NPO 法人 COCO 湘南は 3 つのグループリビングを運営しており、現時点では法人内でライフサポーターの人件費を捻出している。このことが、合意が不十分ななかで問題が顕在化しない一つの理由になっているが、運営の持続性の観点からは、今後、費用負担について検討する必要が生じ、それがサービス利用のルールの明確化につながると考えられる。

3.5 変動期（2010 年～現在）の居住者と暮らし

2009 年に開設当初からの居住者 3 人が亡くなり、居住者の入れ替わりが起きた。新たに入居する人たちが相対的に若いため、平均年齢に変化はないが、開設当初からの居住者 4 人はさらに加齢が進んでいる。変動期は安定期と比較して以下のような特徴がある。

第一に、死亡によって退去するケースがなくなり、転居先が有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅、介護老人保健施設等多様になった。これは退去理由の多様化とも関連している。老健へ転居したケースは、脳梗塞で病院へ入院したが、退院後グループリビングは生活上の不安があるための転居であった。有料老人ホームへ転居したケースは、入院し、退院する際、やはり 24 時間型の介護体制がないための選択であった。転居時 90 歳で要介護度 1 であり、居住継続も不可能ではなかったが、こうした選択となった。同じ要

介護 1 でも居住者の中には介護保険を利用しながら住み続けている者もいるが、一度大きな疾病を経験した場合とそうでない場合とでは、他の居住者への精神的負担も異なることから、家族や西條節子氏との話し合いを通して、意思決定をしている。

第二に、居住期間の短いケースが増えており、頻繁な入れ替わりが起き始めている。このことは共同生活にも変化をもたらしており、ミーティングでの発言が活発でない様子や、庭仕事に参加しない様子などがうかがえる。このことは、ライフサポーターの使い方が分からないという声とも関連していると思われる。また、共同生活に関する居住者の発言として、西條節子氏の加齢を心配する声が聞かれるようになった。

4. まとめ

高齢者グループリビングという住まい方を創り出した COCO 湘南台は、「自立と共生」という理念をかかげ、居住者を包み込む形の運営 NPO 法人が「居住者が共同して購入するサービスを選択する」というシステムを 15 年にわたって実践してきた。必要なサービスを共同購入するという柔軟性を持つ運営システムは、居住者の高齢化と入れ替わりのなかでどのように変化してきたのだろうか。そこから見えてきた課題と持続的運営を実現するために必要な方策を、長期にわたる参与観察や法人が所有する記録等を通して考察した。

1) 開設時の居住者のほとんどは、NPO の理事長であり同時に居住者の一人として最初のコーディネーター役を担った西條節子氏と何らかのつながりのある人々であった。それでも最初の 2 年間は多少の軋轢や試行錯誤があったが、今日まで続く月 1 回のミーティングにおける話し合いと西條氏のリーダーシップによって、模索期を乗り越え安定期に移行した。居住者を包み込む形の運営 NPO 法人が必要なサービスを選択して購入する合意形成と意思決定の仕組みは、安定期になると、食事づくり WC の変更、ライフサポーターの導入という具体的な形で展開することになった。

2) 食事づくり WC の変更という、大きな「居住者が共同して購入するサービスの選択」は一度だけ行われた。その後、対等な関係で契約を結んだ WC の経営努力によって食事の水準の維持やニーズへの対応が行われ、安定したサービスが続いている。このようにサービスの共同購入は、信頼関係を築いたサービス提供者の責任感や判断も重要な要素である。ライフサポーターはこうした共同購入の形をとらなかつたことが、安定したサービス提供に結びつかない要因の一つであると考えられる。信頼関係を築きうる事業体からのサービス購入が課題の解決に結びつくと思われる。また、介護保険サービスとの接続性のよい事業体であれば、ライフサポートとケアサービスの切り分けが容易になると考えられる。

3) 安定期は、2009 年に開設時からの居住者 3 名が亡くなり、居住者の入れ替わりが生じたことで変動期へと移行した。変動期の特徴は、入居期間が短いこと、死亡で退去するのではなく新たな居住者が別の高齢者施設・住宅への転居するようになったこと、開設時からの居住者の高齢化が一層進んだことである。西條節子氏がリーダーシップを発揮した 2 度のターミナルケアも今後は難しいという声があるように、西條氏のリーダーシップと開設時からの居住者の緩やかな共同性を基礎とした運営は変化を必要としている。

4) 変動期が今後の常態であると考えたとすれば、これまで西條氏

に頼りがちであった運営 NPO が組織体として、サービス提供事業者との信頼関係の構築、居住者の合意形成、連携可能な高齢者施設・住宅との関係づくりなどに責任をもって当たることが求められる。

以上の点について、後発の COCO 湘南台型グループリビングにおける優れた仕組みづくりも行われている。今後は、それらに学ぶことも必要であり、客観的な立場からの比較研究を進める必要がある。

注

- 注 1) 2013 年 10 月現在の要介護・要支援者数を「介護保険事業状況報告」から、年齢別人口を総務省統計局による推計人口から取り計算すると、後期高齢者の要介護・要支援者割合は 31.5%、要介護者割合は 23.0% である。
- 注 2) 文献 3) は日本自転車振興会（現 JKA）が建設補助を開始し、初年度の補助対象の建物が完成する時期に行った調査研究である。グループリビング運営のための研修マニュアルが中心を占める。建物のなかに「アトリエ」と称する空間を設けることや、入居者の共同運営に重点を置いて解説している点などに、COCO 湘南台をモデルとしていることが明確に読みとれる。
- 注 3) COCO 湘南台の見学は定期見学会と臨時見学会を行っている。過去 3 年間の実績をみると、平均して各回 11 人、年間 200 人近くの見学者が訪れている。これは居住者の生活を考慮して回数や 1 回当たりの見学者数を制限しているなかでの実績である。
- 注 4) 文献 7) はタイトルからみればグループリビングの持続性を扱っているように読めるが、ここで扱っている「グループ・リビング」は過疎地域における積雪期間の居住を当初の目的として作られた住宅であり、家賃も 5 千円前後という低廉なもので食事の提供も行われていない。COCO 湘南台型の都市圏における高齢者グループリビングとは異質なものであり、直接的には参考にならない。
- 注 5) 高齢者グループリビングの創始者とも言える NPO 法人 COCO 湘南の理事長であり COCO 湘南台の居住者でもある西條節子氏が、COCO 湘南台開設の経緯やその暮らしについての著書を出版しており、このことがグループリビングの社会的認知に大きく影響している。文献 11) 12) 参照。その他、COCO 湘南台を紹介した書籍は多数ある。例えば文献 13) 14) など。
- 注 6) グループリビング・みたかの家の運営法人の代表者は NPO 法人 COCO 湘南の理事を務めている。
- 注 7) 地域のなかの交流機能を持つという NPO の方針から 2008 年に庭の一部に「COCO みちしるべ」の建物を建設し、コミュニティ・カフェの運営をはじめた。2012 年から、サービス提供者のワーカーズおりーぶが藤沢市地域住民グループ支援事業による生きがい対応型デイサービスを始めた。
- 注 8) 調査に際しては、以下のように説明を行い、研究協力への同意書をいただいた。目的として「グループリビングの先駆者である COCO 湘南台の 15 年間の変化を調査することによって、グループリビングの持続的運営に資する知見を得ること」、方法として「居住者、運営者、スタッフにインタビューし、生活の様子を観察させていただくこと」、倫理的配慮として「個人が特定できないようにし、研究以外の目的でデータを利用しないこと」である。また、研究中、研究後もいつでも問合せに対応すること、研究結果について報告することを約束した。ただし、西條節子氏の著書で明らかにされている個人情報については出所を明確にしつつ、そのまま使用した。

参考文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の世帯数の将来推計（全国推計），2013 年 1 月推計，2013
- 2) 権珍嬉他：地域在宅高齢者における低栄養と健康状態および体力との関連，*体力科学*，No.54，pp99-106，2005
- 3) 日本自転車振興会：平成 19 年度調査研究事業 高齢者生き生きグループリビング生活共同運営等プログラムに関する調査研究報告書，2008
- 4) 上和田茂他：小規模地域分散型高齢者居住施設の設置動向－在宅の要素を取り入れた小規模地域分散型高齢者介護居住施設に関する研究，その 4，*日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1*，pp.261-262，2007
- 5) 三浦研他：行動観察および会話の分析から見たケア付き仮設住宅 2 棟の統合過程－小規模グループリビングに関する研究，その 1，*日本建築学会計画系論文集*，第 535 号，pp. 91-97，2000.9
- 6) 三浦研他：行動観察および会話の分析から見たケア付き仮設住宅 2 棟の統合過程－小規模グループリビングに関する研究，その 2，*日本建築学会計画系論文集*，第 545 号，pp.129-135，2001.7

- 7) 佐々木伸子, 上野勝代: グループ・リビングの継続条件に関する研究-広島県過疎地域小規模老人ホームの事例より-, 都市住宅学, 第 31 号, pp.51-56, 2000
- 8) 永井悠次郎他: グループリビングに関する研究, その 1, グループリビングの生活実態について-, 日本建築学会大会学術講演梗概集.F-1, pp.1443-1444, 2010
- 9) 久保木修平他: グループリビングに関する研究, その 2, グループリビングの周辺環境について-, 日本建築学会大会学術講演梗概集.F-1, pp.1445-1446, 2010
- 10) 永井悠次郎他: グループリビングに関する研究, その 3, グループリビングの生活実態について-, 日本建築学会大会学術講演梗概集.F-1, pp.1469-1470, 2011
- 11) 西條節子: 高齢者グループリビング COCO 湘南台, 生活思想社, 2000
- 12) 西條節子: 在宅ターミナルケアのある暮らし 続・高齢者グループリビング COCO 湘南台, 生活思想社, 2007
- 13) 早川裕子: 老後は仲間と暮らしたい, 主婦の友社, 2000
- 14) 上野勝代, 石黒暢, 佐々木伸子: シニアによる協同住宅とコミュニティづくり, ミネルヴァ書房, 2011
- 15) 大江守之: 高齢者グループリビングの可能性と課題, 都市問題研究, 第 57 巻, 第 10 号, pp.31-42, 2005. 10
- 16) 高橋郁子: 自立しつつ支え合う暮らし, 明日の友, 165 号, 主婦の友社

A STUDY OF THE SUSTAINABLE MANAGEMENT FOR THE ELDERLY GROUP LIVING

Consideration based on the 15 years' experience of COCO Shonandai, the pioneer case

Natsue DOIHARA and Moriyuki OE***

* Senior Researcher, Keio Research Institute at SFC, M.Health Management

** Prof., Faculty of Policy Management, Keio University, Dr.Eng.

Elderly Group Living (EGL) “COCO Shonandai” have started the practice of new habitation style of the elderly on the principle of “independence and symbiosis” in 1999 and 15 years have passed. The residents became older and turnover of residents have occurred. We analyzed the correspondence of the management organization to these changes and made the problems clear as follows.

1) The residents from the establishment of COCO Shonandai were almost all acquaintances of Ms. Setsuko Saijo, the chief director of the management organization. Although some troubles had occurred for two years since the opening, the experimental stage had been overcome through the leadership of Ms. Saijo and the discussion in the meeting of the residents once a month. The system to buy the services based on the residents' needs commonly had become in operation in the stable stage, so that the workers collective of the food supply was changed and the life supporter was introduced.

2) The new workers collective group has continued to prepare the meal until now. The reason of continuity is the effort of the workers collective group to maintain the quality level of the meal and to respond to the needs of the residents. The unstable service condition of the life supporter system is caused by the contract with individuals. It is possible to purchase care services from the community and it is necessary to find or bring up the organization which provide appropriate care services.

3) 3 people who have lived since the start point passed away in 2009 and the new residents joined as new members. Although ageing and the increase of the care-needed members were eased temporarily, the situation will proceed to the changing stage. The characteristics of this stage are the reduction of the residential period and the moves to a nursing home or an assisted living facility. COCO Shonandai has faced the turning point to change the system of the reliance on Ms. Saijo and the shrinking cooperation among the long-term residents.

4) The residents of COCO Shonandai have changed frequently since 2010. This situation might continue and the diversity of residents will extend. It is necessary to improve the decision-making or consensus system to correspond to the new situation. The management body should have responsibility to cooperate with the service suppliers, to make consensus among the residents.

(2014年9月10日原稿受理, 2015年5月25日採用決定)